

地域と共に生徒の学びを 「社会」と「将来」につなぐ これからの学校づくり

今なぜ学校を社会に開く必要があるのか、
また、そのことによって生徒にどんな力をつけることができるのでしょうか。
そして、より良い高校と地域の協働のあり方とは？
文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革事業」の
企画評価会議で座長を務める浦崎太郎先生に伺いました。

大正大学地域構想研究所 教授 浦崎太郎

1965年生まれ。広島大学大学院 教育学研究科 教科教育学専攻 博士前期課程修了の後、郷里の岐阜県で高校教員となる。県立恵那高校、岐阜高校、羽島北高校勤務の間、人事交流で中学校勤務を経験し、勤務先で総合学習を支援するNPO（洞戸村ふるさと塾）の設立に参画。また、2007年からの4年間、岐阜県博物館ではアウトリーチ事業などの社会教育に取り組んだ。最後の勤務校となる可見高校では、「地域課題解決型キャリア教育」の普及に尽力し、全国組織の設立に参画。2015年より文部科学省中央教育審議会生涯学習部会学校地域協働部会専門委員。2017年より現職。

今なぜ社会に開かれた教育課程が求められているのかを考えるには、まずこれからの社会のあり方を理解することが大前提となります。今は旧来型の良い大学に入って良い会社に入れば幸せになれるという時代ではありません。また、若い頃に注入した知識で一生食っていける、そのためにみんなが等しい知識技能を得れば良い、という時代でもありません。

「多様性」と「対話」のある場で これから必要な力を育む

現代は、工業社会であったSociety3.0から情報社会であるSociety4.0に移行しており、さらには超スマート社会であるSociety5.0に向かっていきます（図1）。ですが、多くの学校はSociety3.0の時代で止まっている。工場の現場労働者を育てるための教育は、言われたことをきちんとやり点数を取れる生徒を育てれば事足りましたが、定型業務は機械が担う時代です。おまけに、企業の人材育成能力も下がっています。この時代に、幸せに生きていくためにはどんな力が必要でしょうか。

Society4.0以降の社会に必要なのは多様性（ダイバーシティ）の中で対話的、協働的に知恵を生み出す力です。実は、20年前にゆとり教育が打ち出されたときすでに提示されていた方向性

だったのですが、残念ながら現場がついていけなかった。ダイバーシティがなく対話も生まれにくくSociety3.0的な学校の中だけでは、十分に力をつけられないのです。

そんな状況で必要な力を育めるのは、多様性も対話もある学校の「外」ということになりますが、豊かな経験ができるかどうかは、家庭環境や地域によって変わってくる可能性が大きい。下手をすれば格差が広がるということになりかねません。学校とはそもそも、特に公立学校は、教育の機会均等のセーフティネットであるはずで、生徒が幸せに生きていける力をつけるために、あらゆるリソースを活用すべき。それが学校を社会に開く意義なのです。

リアルな社会での探究活動で 個性や人間性が磨かれる

知識・情報の伝播スピードが速くなるに伴い、その価値が下がるスピードも速くなります。知識はもちろん必要ですが、替わって必要となるのは、知識を活かし、知識を生み出していく力です。AIの時代になればなおさら、人間にしかできないこと、その人ができないことを失らせていくことが必要になります。

では、どんな環境であればその力が

図1 社会の変遷と教育の変化の方向性

Society 1.0 狩猟社会	
Society 2.0 農耕社会	均質性重視 ・先祖伝来の土地や文化をそのまま継承 ・個性や抜きん出た才能は不要
Society 3.0 工業社会	均質性重視 ・「規格品の大量生産」が富の源泉 ・人も「規格品の大量生産」…個性は封印
Society 4.0 情報社会	多様性重視 ・「三人寄れば文殊の知恵」が富の源泉 ・「個別最適化」で熱情や個性を徹底開放
Society 5.0 AI社会	多様性重視 ・「人間にしかできないこと」が富の源泉 ・一人ひとりの感性・興味関心に応じた探究

遅
↑
知識の価値低下
↓
速

►教育の変化の方向

Society
3.0 (工業社会)

- ・定型作業に需要
- ・人も規格品が有利
- ・生徒は学校に従属
- ・興味関心を封印
- ・全員一律(40名クラス)
- ・管理強制
- ・人や社会から遮断
- ・学校で完結可能



Society
4.0 (情報社会)

- ・価値創造に需要
- ・尖った人物が有利
- ・学校が個性を開花
- ・興味関心を尊重
- ・学びの個別最適化
- ・挑戦に伴走
- ・人や社会とつなげる
- ・学校で完結不可能

平成は世界の潮流に逆行して衰退した時代

育つのか。一つには、自分の考え方や意見を表現することで個性に気づくチャンスのある、より豊かな学びの環境です。もう一つは、得意なことを活かして役割を果たすことで、自分の存在価値を見出せる環境です。

リアルな社会とつながって探究活動を行うことが、その近道といえるでしょう。人間にしかできない、現場で感じることを、問いを立てること、意味を味わうことは探究のプロセスに含まれます。感性には個性が現れるので、その人らしさが磨かれます。今の学校の中だけで尖った人間を育てようと

すると大変ですが、社会に出せば可能性は広がります。もう、学校の中に生徒を閉じこめていることに合理性はないのです。

まとめれば、Society3.0から4.0以降に向けた教育の方向性は、定型作業から価値創造へ、全員一律から個性重視、個別最適化への変化です。そのような教育は、Society3.0の学校内だけではなし得ない。学校は社会から遮断された場所ではなく、生徒を人や社会とつなげる場合、教師は管理から挑戦を伴走するあり方へと変化するべきです。誰が教育をするのか、

必要なのは多様性の中で 対話的・協働的に知を生み出す力

教育目標をどう定めるのか、学校の概念を拡張する動きは、既に一部の高校で始まっています。

一緒に汗をかける関係が 連携・協働の目指す姿

文部科学省が示した社会に開かれた教育課程の理念は、「よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を学校と社会とが共有し、それぞれの学校において、必要な教育内容をどのように学び、どのような資質・能力を身に付けられるようにするのかを明確にしながら、社会との連携・協働によりその実現を図っていく」(文部科学省「高等学校学習指導要領(平成30年告示)」前文)として、3つのポイントが示されています(図2)。

私が企画評価会議の座長を務める「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」でも、この理念を体現し、地域課題の解決などを通じた探究的な学びの充実を図ることで、さまざまなフィールドで活躍する人材

が育成される仕組みの構築を促しています。

協働とは、双方が望むことを丁寧にすり合わせ、お互いのために力を出し合うこと。社会が生徒を受け入れる体制を作るだけでなく、社会と共に教育目標を磨き、教育内容を充実させることが理想です。生徒の成長のために一緒に汗をかける関係といってもよいでしょう。

地域から頼まれるまま人手として生徒を派遣しても、得られるものは限定的です。さらにいえば地域連携が目的化して、個人の興味関心に基づかない「やらされ探究」や「見た目だけ探究」に終わる例も同様です。

個別最適化を意識した カリキュラム開発を

私が講演等で示す、地域探究の課題設定8箇条(図3)では「ジブングト」であることを一番に掲げています。「個別最適化」は、これからの学びのキーワードの一つです。教科学習でもいえることですが、生徒が夢中になって、



学校と社会が役割分担し 生徒に力をつける

そのことばかりを考えてしまうほど熱中するような課題に出会えば、学びは加速されます。

また、教科学習で扱う本質的な問いを含んでいたり、自分の特技や持ち味を発揮することで、社会に貢献できる可能性のあるテーマであることも大切です。地域側が困っていることや実現したいことと、自分が実現したいことが噛み合っていること。さらには、実現に向けた具体的な行動を含むことも望ましく、先生方にも上記のような観点でカリキュラムを考えていただきたいと思います。

これらはすべて「尖った人材になる」ことや「多様性の中で対話的、協働的に知恵を生み出す力」を実践的に育てるために必要なことです。より多くの生徒が当事者性をもったテーマに出会うためには、より多くのフィールドが必要になります。社会課題解決と個別最適化された問いを重ね合わせるカリキュラム開発は、これからの学校の手腕にかかっています。

目的が共有され学校と社会の 役割分担がされている状態へ

ここまでは、主に地域探究を通して社会に出すことの意義や価値を語ってきましたが、社会に開かれた教育課程の実現とは、生徒を地域に出すこととイコールではありません。「社会に開かれた」ということは、目的が共有され、社会でしかできないことと学校でしかできないことが役割分担されている状態です。

学校の特性は何かといえば、思考のトレーニングです。各教科で「こうい

う考え方をすると目的に到達できる」という思考力をつけるために、いろいろな題材を用意しています。世界のことを考えるときには、地理や世界史、英語の力が助けになります。課題を解決するための武器としては、やはり教科の力が必要になるのです。思考のトレーニングをさせるのにふさわしいスキルをもった、スペシャリストが揃っているのが学校です。

学ばずには学べず、より良く生きていけるということであれば学校の存在意義はないはず。フィールドを提供するのが地域、実際に探究プロセス

図2 社会に開かれた教育課程の理念(文部科学省)

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育んでいくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

図3 高校生の地域探究 課題設定 8箇条

- ① **ジブンゴトである**
自分が心底「これをやりたい!」と思える。
- ② **個性と社会のマッチング**
自分の特技や持ち味を活かし、これを伸ばして成長でき、自分の個性が社会で役立っているイメージ(進路展望)をもてる。
- ③ **教科とのつながりがある**
学校の諸科目と「より広く・より深く」つながっている。
(学ぶモチベーションの向上)
- ④ **探究プロセスを含む**
仮説「～すると～なるはずだ」があり、これを検証できる。
- ⑤ **地域のニーズや支援がある**
地元(個人・地域)に具体的なニーズがあり、快く支援が受けられる。
(多様な人々の共感的な参加を期待できればベスト)
- ⑥ **実現性がある**
先生や地元の方々が連絡・調整・経費面で負担感を覚えない。
- ⑦ **行動につながる**
評論家的な提案に終わらず、知恵を絞り、汗を流すことで、課題解決に貢献できる。(提案・計画は「仮説」、行動して「検証」)
- ⑧ **完結する**
決められた期間内に「一話完結」できる。
(壮大な構想の尻切れトンボはダメ)



地域と学校が相互に影響しあい プラスの変容を遂げる社会に

などの思考をトレーニングする場が学校。学びの場を社会に広げ、役割分担をして力をつけることが社会に開かれた教育課程の二つの側面だと思います。

カリキュラムマネジメントの目的は、一人ひとりの生徒のなかで学びが有機的に結びつくこと。自ら問いをもち、自らのもつ知識や考え方を活用する事で、学びは組織化されます。当事者性のある課題に出会い、教科の力を動員して解決にあたれば、教科学力も伸びます。ここにもまた、学校を社会に開く意義があるでしょう。

「目標の共有」は一人の生徒を チームで育てることから

「目標を学校と社会とが共有し、社会との連携・協働によりその実現を図っていく」といわれても抽象的でイメージしにくいために、何から始めたらいいのか、誰と共有したらいいのか、と頭を抱える先生も多いことでしょう。実際、目標を共有するのも、協働をスタートさせるのも、簡単なことではありません。

そこでまず一人の生徒から始めてみませんか。「この子は今、こういう興味関心や意欲、能力がある。この子をこうしたい」と思ったらそれを思い当たる校外の大人たちに伝えてみる。生徒の探究テーマや進路志望を伝えて、地域で体験や調査をさせてもらうというこでもよいでしょう。

目指す生徒の成長イメージを伝えて送り出し、受け入れ側から生徒の様子を聞き取ったら学校でさらに必要な支援をする。「HR担任から役場の○○さんにパスを回したら生徒がこう成長した」といったエピソードの蓄積が大切なのです。事例が蓄積すれば、生徒たちの顔を思い浮かべながら、教育内容や目標への建設的な意見を伝え、チームになつてくれる地域の人も増えるはずです。

一人の生徒をチームで育てることから始め、事例や連携先を増やしていくましよう。そのうえで、多様な興味関心をもつ集団をどう育てていけばよいのかを考えること、それがカリキュラムマネジメントです。

Society3.0から4.0以降への移行は、学校だけでなく社会全体に突きつけられている課題です。私は高校教員時代に生徒の学力が崩壊していく様子を肌で感じていました。平成のゼロ年代中ばまでは、生徒は普通に勉強をしていました。就職氷河期が訪れ、真面目に勉強をして大学に行っても就職ができない時代になったら、それまでの「勉強する意味」が通用しなくなりました。ゆとり教育で打ち出された理念とは裏腹に、勉強から逃げる生徒たちを、興味関心を伸ばすことではなく、管理することで学力を維持しようとしたのが平成の時代です。

学校が生徒のためにとあれもこれもするようになったのと、家庭や地域の教育力の低下、地域の活力低下は同時並行して起こったことです。新しい時代に向かうために、これ以上学校だけで何かをするには限界があります。子どもたちをどう育てたいのか。地域と対話しながら、協働しながら新しい学校の姿を創っていくことで活路が開けます。

社会と学校が、相互に影響しあいながら、プラスの変容を遂げていく。そのなかで、幸せに生きていける生徒をとともに育てる、そんな未来を一緒に作っていきましょう。

